



TITLE:

乾隆北京全圖に就いて

AUTHOR(S):

今西, 春秋

CITATION:

今西, 春秋. 乾隆北京全圖に就いて. 東洋史研究 1939, 4(6): 528-537

ISSUE DATE:

1939-08-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145650>

RIGHT:

乾隆北京全圖に就いて

今 西 春 秋

一、現存最大最古の北京地圖

二、その體裁と大きさ

三、その作られた年代

四、最初の北京地圖と乾隆北京地圖

五、乾隆北京地圖と同治北京地圖、其の他

一、現存最大最古の北京地圖

今から五年前、民國二十四年の春のことです。が、北京故宮の内務府造辦處興圖房内からとても大きく大きな地圖が発見されました。題して乾隆北京全圖としましたものがそれです。これは以前その一部が故宮東路の興圖室内に陳列してありましたので、已に御存知の方もおありかと存じますが、恐らく北京全市街圖としては最大最詳のしかも亦現存最古のものであらうかと思はれるのであります。

私たま／＼去年の秋から故宮内に入り込んで居りましたところ、此頃或る機會に、事變前營造學社がこれを全部二百三枚の寫眞に收めてゐたこと、それからまことに都合のよいことには、その原板が尙皆故宮總務處内に殘されてゐることを知りました。そこで二三交渉の細果、嬉しいことにこの寫眞全部の焼付けを安値に手に入れることが出来たのであります。

こゝに、些か御紹介申し上げたいと存ずる所以であります。

二、その體裁と大きさ

そこで先づこの地圖の體裁から申し上げますと、北京全市を北から漸次十七排に分ち、每排又東・中・西の三路に分つて、この一路宛を一冊宛の折本に仕立て都合五十一冊の大形折本から成つてをります。この折

本は東西兩路の分が每冊十六頁、中路の分が每冊二十頁であります。但しこの頁數は外城の方で圖が一杯になる様に取つてありますので、内城の方では東西兩路分の左右に相當ブランク頁を残してをります。第十一排の下方に前三門を連ねる城壁があります。つまり第十一排で外城に入つてをるのであります。毎頁の大きさが、曲尺で縦二尺七寸四分乃至五分の横一尺六寸八分乃至九分。頁によつて差異があるのは裏打ちの際に出來た歪らしく思はれます。試みにこの折本全部をひろげて見るとすると、縦四丈六尺六寸に横四丈三尺七寸、面積にして大約五十七坪はまづ相當なものであります。あとで又申し上げますが、故宮文獻館の編纂員曹宗儒君はこれを六百五十分の一圖だと勘定致しました。發見されたときは、虫食ひだらけのボロ／＼だつたさうであります。これをもと通りの體裁に繕つたのだと文獻館では話してをりました。そのもと通りの體裁と申しますが、厚さ二分餘りもあらうかと思はれる厚紙で出來た折本でありますから、女、子供の手などでは持ち運びも容易でないといふ程のシロモノであります。

まあざつとかういふ大地圖であります。それですから寫眞で御覽になる通り、宮殿、樓閣、寺廟などの大建築物は言はずもがな、市井一介の民家陋屋に至るまで最大洩らさず、しかも巧に遠近法を應用して刻明に描き盡したものでありまして、この點地圖といふよりも寧ろ鳥瞰圖とでも言つた方が、相應しいおもむきを具へて居ります。全體は墨繪であります。河や池、丘陵などには夫々青又は褐色の淡い色どりが施されてをります。それから折本每冊の表紙には、その一冊の中に含まれた重な地點、邸宅、寺廟などの名を標出致してをります。例へば第二排中の一冊の表紙には「國史館、錢局、鐘樓」と記して、この一冊の中に含まれた重だつたところを示してをるわけであります。(後掲目録參照)

尙、輿圖房内の地圖には絹に描かれたものが尠くないので、念のためつけ加へておきますが、この圖は紙に描かれたものであります。

三、その作られた年代

さてかういふ驚く可き大地圖であります。この地

圖には序だとか跋だとか、若しくは年號、描いた人の姓名など一切記すところがありません。紛失したのではなくても、なかつたものらしく思はれます。今のところ、これらのことに就いて記した傍系史料も見當つてをりません。然しこの地圖が、已に標題に掲げておきました通り乾隆、詳しくはこれから申します通り乾隆十五年の頃に出来たものであることは略々疑ひのないところかと考へられるのであります。この年代は私が考へたものではありません。さきに申しました曹君が考へて、文献特刊に「清内府藏京城全圖年代考」と題して掲げてゐるのであります。この考説は無記名でありますが、曹君の説に相違ないことは故宮文獻館の保證するところであります。そこで曹君の説といふのを御紹介申し上げます。

『この北京圖の目は、已に乾隆二十六年の造辦處興圖房輿圖目「蘿圖薈萃」といふものゝ中に見えてゐる。即ちこれを以て本北京圖は乾隆初年のものである。即ちこれを見當はつて、更に地圖中の地名に就いてよく考へて見ると、第一、西帥府胡同の賢良寺は乾隆二十年に冰盞胡同に移轉した。然しこの

圖は仍ほ原地にある。第二、長安門外の三座門は乾隆十九年に増建し、訖山五峰に亭が建てられたのは乾隆十六年のことである。ところがこの圖にはともにこれ等のものが記されてゐない。第三に又、西苑の闡福寺は乾隆十一年に建てられ、景山の東うしろの所にあつた壽皇殿は、乾隆十三年に景山の眞うしろの所に移建せられた。此の圖には已に闡福寺もあり、壽皇殿も亦景山の眞うしろに位置してゐる。よつて以て思ふに、この圖の繪修年月が當に乾隆十四五年の間にあらうことは殆んど疑を容れないところであらう。』

と。以上曹君の年代考證であります。

所で森さんの御注意によりますと、壽皇殿の移建は乾隆十四年のこととあります。このことは光緒會典八六三に見えて居ります。それで十三年といふ年は何處から出たのか私、曹君に質して見ましたところ、これは彼が會典中の年號を記憶違ひしてゐて書いたことなのだそうです。私つらく見えて居りますに、曹君に限らず支那の學者先生といふものは實によく色んなことを詰じてゐて、たちどころに筆を執りますが、又この種の失敗尠くないものゝ様で

あります。

そこで結局、この圖の繪修年月は乾隆十五年といふぎり／＼のところまで、つきつめられる様であります。が、然しまあこれだけの大きな地圖の一部分だけのことによつて斷言してしまふのは穩かでありますまい。或る程度の區劃々々が漸次完成されたであらうことも考へられないわけではありませんから、大約この頃と見ておいたらいゝのだらうと思ひます。

次に誰人がこの圖を作つたかに就いては残念乍ら尙考ふ可きなしと曹君も記してをります。今も尙分らないとは曹君の話であります。私も實は念のためと思ひまして、實錄其他若干心當りのものも繰つて見たのでありますが、さきにも申します通り、つひに手掛らしいものをも得ることは出来ませんでした。

四、最初の北京地圖と乾隆北京地圖

始めに本圖は六百五十分の一圖だと曹君が言つてゐる旨一寸申しましたが、このことも矢張り今の考説中に記してゐるのであります。

清宮史續編（嘉慶年編）輿圖目の一項に、

京城全圖計五十一冊。紙本凡十七排。每排縱約二尺六寸。分東西中三路。東西橫一丈三尺。中橫一丈六尺二寸。

といふ記載がありますが、これが今こゝで問題にしてゐる地圖に就いて記したものであることは言ふ迄もありませんまい。横の長さは折本を全部ひろげての長さであり、尺は營造尺でありますから、私の申し上げた曲尺の寸法とは較々違つてをります。曹君はこの輿圖目記載の寸法と、それから清會典の京師城垣規制に、

内外城東面共長二千八百七十二丈三寸。北面二千三百三十二丈四尺五寸。

とあるものとを比較して、この圖は當に六百五十分の一圖だと勘定したのであります。尤もこんな手續きによらなくとも、今の實際の市街面積と地圖の大きさを比較して見てもよい筈であります。曹君のひつぱり出して來てくれた文献が嬉しいわけであります。六百五十分の一といふ數は私は勘定しなほして見ませんが多分あつてゐるだらうと思ひます。私の好朋友で京大の大地理學者である室賀信夫君の懇切な書信を寄せ

て教へてくれたところによりますと「六百五十分の一の縮尺といふものは市街圖としては市街の全部揃つてゐるとすれば珍らしく日本は大抵三千分一位にて五百分一といふ様なものもあれど、それは極く一部都市計劃の爲の圖のやうなものに過ぎず、六百五十分の一にて大市街圖を作つたことは珍らしいことに思はれる」とあります。その地圖面の大がゝりなことは寫眞で御覽になる通りでありまして、流石乾隆盛代の産物だと思はざるを得ないのであります。この程の大地圖を作るのに如何程の困難があるものか、又さしては無いものか、このことはこの地圖の精密度如何といふこともと關聯して考へて見ねばならないことなのであります。が、實はその程のことは一向私には分らないのであります。然し考へて見ますに、支那の測量事業はこれよりさき、康熙末年の頃に於いて空前の大成果を収めてをります。かの大皇輿圖を作り上げた技能を以てすれば、この北京圖が如何に尨大であり、又精密であるからとて、それは要するに仕事の量の問題であつて、技術的には或はさした困難を感じずしてもよし得たものかとも考へられます。しかもこゝで申し上げておか

なければならぬことは、北京の地圖は已に早く康熙年間に一たん測繪せられたことがあると言はれてゐることに就いてあります。後藤末雄博士の「支那文化と支那學の起原」の中に次の様に説かれた一説があります。

『康熙帝は西歐科學文明の發達に驚かれると同時に西歐學僧の科學的造詣や操作の熟練に感服されたのであつた。偶々君側の耶蘇會士が北京市及び其の近郊の地圖を測成した。彼等は支那人の通説を斥け、正確な幾何原理に従つて其の地形を測量したのであつたから、皇帝は此の地圖をみそなはし、その正確なことを歎賞された。』

かうあつて、それから例の全國測量の大事業に着手されたものであることが述べられてあります。洵に興味深い記述であります。然し残念なことには、この北京市及び其の近郊の地圖を作つたといふのが何時頃の 것인가、この記述からは判明しません。大體この記述の出典は *Le P. du Halde's Description de l'Empire de la Chine* であります。それから *Richtshofen* も例の *China* の中にデュアルドから取つて用

ひてゐることを先日フックス博士に教はりました。けれども矢張り兩者共に年代の記述を缺いてをります。支那側にはこの記述にあたる様な記録が今のところ見當りません。残念なことでありますが、然し北京市の科學的な地圖が康熙時代已に早くも作られてゐたものであるといふことはこれによつて考へ得られるだらうと思ひます。故宮で訊くと興圖房内には未だ澤山未整理の地圖が残つてゐると言ひます。或はひよつこり現物が飛び出す様なことが無いとも限りますまい。現にこの考へ方を力附ける様な地圖が見出されてをります。と申しますのは、中國營造學社彙聚第六卷第二期（民國二十四年十二月）に劉敦楨君が「清皇城宮殿衙署圖年代考」と題して發表してゐます、あの清の皇城圖と稱してゐるものであります。この圖は現在南遷して北京に残つてゐませんが、劉君の記述と寫眞とによつて伺ひますと、圖の範圍は南、大清門から起つて、東、東安門、北、地安門、西、西安門と大體この四門によつて劃される一劃、所謂皇城根一區を包含するものでして、圖の大きさは縦七尺八寸五分の横五尺九寸。絹本であります。この大きさは概算して乾隆北京圖の約

五分の一大位の様であります。宮殿、樓房、家屋等の一個々々を詳細に描き出した手法は殆んど乾隆圖と變りありません。非常によく似たものだといふことが出来ます。この圖の年代を劉君は考證して康熙代のものであらうとしました。論證の仕方は曹君のやつた様に何代の建物が見えるとか見えないとか云つた式のものでありますから、こゝでは格別申し上げません。詳しくは彙刊に就いて見て頂きます。兎も角劉君によれば假令一部分にせよ、康熙時代に早や斯の如く立派な北京市街圖が存在したことになります。然しこれを以てデュアルドの傳へるところの北京市街圖の一部分であるなどと言ふのではありません。外人宣教師の手になつた最初の北京市街圖がこれ程のスケールと支那臭さとを有つたとは考へられません。しかも曹君の語るところによれば、これは少々年代を引き下げて雍正のものと思ふべきではないさうでありますから、一層いけないことになります。然し乍ら、かく程の圖を作り得た素地を考へて見ますと、考へは自づとデュアルドの北京圖に及びはしないでせうか。つまりこの圖の存在は、デュアルドの北京圖といふものを考へるのに、

何やら一步の近づきを與へたものゝ様に思はれるのであります。皇宮圖と乾隆圖との關係に至つては最早や贅言を費す必要はありませんまい。皇宮圖の規模が更に擴大して乾隆圖になつたものであることは一見して首肯し得られます。御存じの如く、乾隆帝の事業には、康熙帝のそれを模倣擴大したあとが到るところに見受けられます。デュアルドの圖から皇宮圖、それから更に乾隆圖と辿つて見ますと、こゝにもまことに好いその一例が考へられるのではないかと思ひます。

五、乾隆北京地圖と同治北京

地圖、其の他

以上申し上げるところによりまして、結局現存物中最古のしかも最大の北京地圖は、この乾隆圖だといふわけになるのであります。かういふ法外に龐大な地圖が果して幾何程度にまで實用性を具へたものか、たゞ乾隆帝の趣味といふ程のことで出来たものか、その程のことは、今私には分別致し兼ねます。然しこれが現在史料としての價值に就いては、已に前述曹君などが着々と研究を進めて、その甚だ高いものであることを

明らかにして居ります。序にこゝに御紹介申しておきますと、曹君の研究は「北京城坊考」と題して堆い原稿が出来てをります。曹君推敲の上は何れ何とかして世に出る様にしたいものと思つてをります。

乾隆圖は同治に至つて改訂が加へられました。これは結論をさきに申し上げることになりましたが、實は故宮の中に、もう一本乾隆圖と同大同様の地圖がありまして、これを、やはり曹君が考へて乾隆圖を同治のときに改訂したものだしたのであります。これは乾隆圖と全く同一寸法、同一描法に成つたものであります。たゞ乾隆圖の折本に對してこれは卷子仕立てになつてをります。紙を用ひてゐる點は同じであります。乾隆圖の一冊が一卷子に仕立てられてをりますから、全部では五十一卷ある筈であります。紛失したものがあつて現在には三十七卷しか残つてをりません。序も何もないことは乾隆圖と全く同じであります。たゞところ／＼邸宅が變つたり胡同が變つたりしてをります。この變つた跡を考へて曹君は同治だとしたのであります。先頃曹君の後輩である單士元君が、輔仁學誌第七卷第一二期號に「恭王府沿革考略」といふも

の書き、この中に本圖の部分寫眞一葉を挿入して、同元間の圖だと説明してありますが、これはまだ最近まで曹君の「光緒ではない」といふ考へが出来上らなかつたので、曹君の舊考の儘かくは説明しておいたのだと單君も語つてをりました。私は曹君に、同治だといふ理由を質して見ましたが、一向曖昧で要領を得ませんでした。然し同君の「同治北京圖考」は不日發表の約束になつてをりますから、暫くお待ち願つて詳しくはそれに就いて見て頂くことゝ致します。

以上で乾隆北京圖の御紹介を終りましたが、尙一つ附け加へて申しておき度いことは、故宮出版の「清内務府造辦處興圖房圖目」の「都城宮苑」の項に見える二三の地圖に就いてゐあります。まづこの項第一に京城全圖二份とあがつてゐます。これは今迄申し上げてきました乾隆圖と同治圖のことでありますから、今更申し上げることはありませんが、その次に「北京城圖一幅」といふものがあがつてをります。これは清宮史續編興圖目にも見えてゐるので、實は私は最初、これぞ或は所謂康熙圖とも稱し得べきものではないかと胸躍らせたのでありますが、一見致しますに、北京圖と

は以ての他、實は山東から山西の方面までも含んだ、まあ河北圖とも云ふ可きものでありまして、北京は五分四方位の四角にしか過ぎません。一寸失望致したのであります。續いて次に二つ見える「京城圖式一幅」或は「北京城圖一幅」などいふものも、まことにつまらぬ地圖で、殆んど申し上げる程のこともありません。それから「乾清門至太和門圖一幅」「午門至天安門圖一幅」「天安門至大清門圖一幅」。この三幅も一向にバツとしないものであります。然しそのあとの「景山圖一幅」「北海圖一幅」「中海圖一幅」「南海圖一幅」この四幅は何れも相當見榮えのする古地圖であります。景山圖が同治のものであるといふ他は例によつて何時頃のものかも、まだはつきりしてをりませんが、何れ故宮工作人諸君によつて詳しく考へられる筈になつてをります。さきの三幅はバツとしない、のちの四幅は相當バツとすると申しましたが、然しバツとするしないに拘はらず、これらの圖が乾隆圖と同一様式のものであることだけは一見して確かめ得られます。たゞこれ等の圖が極く部分的のものにしか過ぎないといふ相違があるのであります。兎も角、北京圖の一部と

して御紹介だけはしておいていゝかと存じます。「南海圖」以下にあがつてゐるものは未だ見てをりません。

以上乾隆圖につき、少々その枝葉の様なものをも含めて申し上げた次第であります。勿論問題はこれを一箇の北京地圖史、大きくは支那地圖史とも稱す可きものゝ中に於て見てこそ又格別の意義も興味も見出されるのでありませうが、然しそれは今私のよくするところではありません。幸ひ御列席の森先輩は官撰私撰の北京地圖につき殊の他豊富なコレクションを作つておいでになります、識見亦他の及ぶところではありません。私がこの様なものに興味を有しましたのも、實は度々森先輩のコレクションを見せて頂いてゐる中に、つい感染してしまつてのことであります。一個系統ある北京地圖史に就いては更めて森先輩の卓見を拜聴したいものと存する次第であります。

(昭和十四・四・六。於北京學會講演)

附。乾隆北京全圖目錄

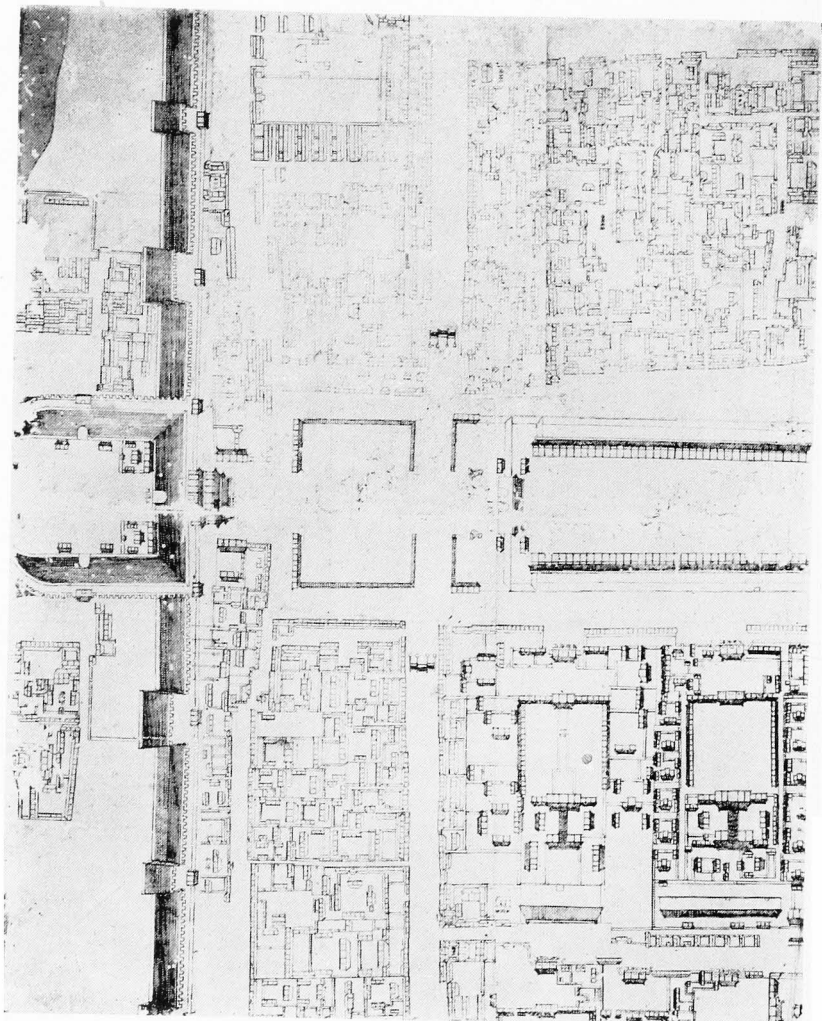
乾隆北京全圖目錄

(數字は排數を、東・中・西とあるは大々東路冊、中路冊等の意なるを示す。)

- | | |
|-----|---------------------------------------|
| 1 東 | 經史館 |
| 中 | 安定門、寶泉局西廠、拈花寺、德勝門 |
| 西 | 積水潭 |
| 2 東 | 栢林寺、理郡王府、履親王府、多羅貝勒允祁 |
| 中 | 國史監、錢局、鐘樓 |
| 西 | 固山貝子弘景、砲局、輔國公弘曠、崇玄觀、貝勒球琳 |
| 3 東 | 東直門、北新倉、寶錢局 |
| 中 | 大興縣、順天府、鼓樓 |
| 西 | 護國寺、恂郡王府、多羅貝勒弘明、西直門 |
| 4 東 | 和親王府、興平倉 |
| 中 | 愉郡王府、地安門、宛平縣、和敬固倫公主府、顯佑宮、多羅貝勒裴蘇、順天府儒學 |
| 西 | 莊親王府、護國寺、果親王府、慎郡王府 |
| 5 東 | 南新倉、富新倉、舊泰倉 |
| 中 | 織染局、咸親王府、弘仁寺、簾子庫、花砲作、蠶壇、吉安寺、闡福寺、大西天 |
| 西 | 莊親王府、輔國公九如 |
| 6 東 | 東作廠錢局、南作廠錢局、怡親王府、固山貝子、弘曉、朝陽門、恒親王府 |

- 中 隆福寺、崇竺寺、景山、漢經廠、永安寺
西 帝王廟、妙應寺、阜成門
- 7 東 泰平倉
中 乾清宮、光明殿
西 康親王府、貝勒永興、順承郡王府、輔國公興寧、輔國公弘脔
- 8 東 祿米倉
中 太和殿、光祿寺
西 輔國公恒魯
- 9 東 寧郡王府、輔國公如松、寶源錢局
中 社稷壇、瀛臺、賢良寺、太廟、皇史宬、信郡王府
西 簡親王府
- 10 東 貢院
中 裕親王府、翰林院、鑾駕庫、昭忠祠、顯親王府
西 平郡王府、輔國公斗保、輔國公成保、輔國公伊爾登
- 11 東 崇文門、泡子河、東便門
中 大清門、正陽門、輔國公盛昌
- 12 東 西便門、宣武門、象房
中 琉璃廠
西 鑲藍旗營房
- 13 東 廣渠門
中 精忠廟、金魚池
西 善國寺
- 14 東 正藍旗營房
中 天橋
西 廣寧門、報國寺、法源寺
- 15 東 萬柳塘
中 大享殿
西 法源寺
- 16 東 正藍旗新營房
中 天壇、先農壇
西 弘仁萬壽宮
- 17 東 左安門
中 神祇壇、永定門
西 右安門

圖版第八 乾隆北京圖
(原件北京故宮博物院文獻館所藏)



圖は第十一排中路冊中の二頁。中央下部の門が正陽門、俗に所謂前門である。今西「乾隆北京全圖」に就いて参照。